《論　説》

女神のムネモシュネ(一)　ディアナ女神

上山安敏

ヨーロッパ人の心の中で、女神像は記憶としてイメージされている。ミューズ（女神）はムネモシュネ（記憶の神）であった。どうもヨーロッパ人の精神史へのアプローチには女神の系譜をたどることなしには理解できないのではないかという思いがあった。それにはただギリシヤのヘレニズム文明とユダヤ＝キリスト教のヘブライ文明の衝点と習合という宗教現象の次元で終ってしまうとたんなる神話の物語的解釈になってしまう。そうでなく、エジプト、小アジアを含めた地中海世界に射程を拡げ、これらの神々の古層、つまり太母神（マグナ・マーター）にまでたどりつかないと、原初的なものはつかめないと考えてきた。

バハオーフェンは一八六一年に『母権制』を著して、ギリシヤのオリュンポスの丘に鎮座するゼオス、アポロンの神々は、父権制の勝利したギリシヤの心象風景であり、神話群の変遷を逆にたどっていくと母権制の優位した神話群が古層として存在していることを発見した。しかしバハオーフェンの業績は、中世以降近代にまでたどりついた記憶には余り触れなかった。そこでヨーロッパの女神の集合的記憶が近・現代にどう生きているのかということに興味をもったのである。

以前に、「ユリイカ」に「魔女と母権制」という題でエッセーを書いたとき、ヴィクトリア女神のことに触れた。美的に精錬化され、カルト離れをしたヴィクトリア女神は、国家公認の宗教となったにもかからず、フリュギアの太母神とのかかわりを持たざるを得ない事情は私に衝撃的だった。

そのヴィクトリア崇拝は、国家宗教になったキリスト教から祭壇を破壊されたことに見るように抑圧を受けた。にも拘らず民衆の中に生き続けた。人権宣言をうたったフランス革命は徹底した男性中心なのに、ドラクロワが自由の女性像を画くと革命のシンボルになる。アメリカに飛火してニューヨークのリバティ島に屹立する自由の女神像に記憶を残している。

そこで今回は、ヴィクトリア女神に続いて、ディアナ信仰をとりあげたい。

ヨーロッパで、ディアナ女神信仰ほど分布的にも広く普及し、長く生命力を持ち続けた信仰は少ないといえるだろう。ギリシヤ、ローマの古典古代の時代に民衆の敬虔な信仰を受けていたディアナ女神は、やがてキリスト教時代の中で魔女の典型とされ、受難の時代を迎える。だが、異教主義は、王侯諸侯の宮廷文化に庇護されながら生き延び、十六世紀のロンドンのダイアナ崇拝熱として蘇生している。イギリスのエリザベス女王崇拝とディアナ女神と習合してロンドンでは、「夜想派」に見るように、女帝人気と結びついたのである。

また十九世紀末に、民俗学者フレーザーが十二巻の大著『金枝篇』(The Golden Bough) を執筆したのも、ディアナを祀る聖森での奇好な祭司職継承規則であったことは、いかに知識人の間にディアナ崇拝の魅力にとりつかれていたかを示している。

ヨーロッパで女神の系譜はキリスト教の支配によって消失したのではない。異教主義(パガニズム)は信仰観念として生き続けた。キリスト教の教化はどれだけ実効性があったかおぼつかない。ギリシャ、ローマのパガニズムはキリスト教が北上す

る中欧・北欧地帯ではゲルマン、ケルトの土着信仰と習合しながら復活の機をうかがっていた。

私個人がディアナ女神への興味をもった動機は、小アジアのエフェソスのディアナ＝アルテミス像である。当時世界の七不思儀の一つとされた地中海世界の信仰の中心であった。新興のキリスト教がこの信仰に立向い、衝突した地でもあった。このディアナ信仰がヴィクトリア女神と同じようにキリスト教の攻撃の中で破壊されていくが、ディアナ女神は、ヴィクトリア女神より強く敵視され、やがてキリスト教教会から魔女に転落させられる。この宗教現象は、キリスト教の歴史として大きい意味をもっていると思い、私は『魔女とキリスト教』でも一章を割いて述べたことがある。

アルテミスとディアナの習合

ディアナ信仰はイタリヤを土壌にして全国民の宗教になったが、ギリシヤの女神アルテミスと合流させられている。したがって古典古代の時代に、広くアルテミスとディアナとは同義語として用いられた特異な女神である。ギリシヤに代ってパクス・ロマーナをつくりあげたローマ帝国での、この両女神の合体がディアナ信仰をイタリヤ全土だけでなく、ヨーロッパの女神としての人気を獲得させた原因になっている。

そこでなぜディアナ信仰が強い生命力を持ち得たのかを考えると、ディアナ信仰がギリシャのアルテミスだけでなく、ヘカテとも習合し、さらにエジプトのイシス信仰とも融合している点があげられよう。その背景にギリシヤのアテネを中心としたヘレニズム文明のオリュンポスの神々とエジプト文明のイシスとの相互交流と伝播がある。

エフェソスとギリシヤのアルテミス

ところでディアナ信仰はギリシャ、ローマ、小アジヤの地中海世界での宗教的体系の中にどう位置づけられていた

のか。そこで発見されるのは、ギリシヤのアルテミス女神像と小アジアのアルテミス女神像との間に見られる異質性である。これが後のキリスト教支配の中でのアルテミス＝ディアナ信仰のたどる運命と大きく関係している。ゼオスを頂点にしたアポロの父権的宗教体系の中にあったギリシヤのアルテミスは、清潔で明朗な宗教の中で語られてきた。しかし同時代の小アジアのエフェソスのアルテミス＝ディアナは、エーゲ海沿岸のイオニア、カリア、リュキアの人々の宗教感情を反映していた。小アジアのオリエント的、土着の母性信仰はギリシヤの洗錬化された女性信仰とは異なって、太母神（マグナ・マーター）の性格を帯び、性的、オルギア的母性を残していたのである。

このことは、キリスト教の発生以来、異教主義の意味合いを考えさせる。ギリシヤ、ローマの宗教と、性的な、オルギア的なオリエントの色合を濃厚にもった小アジヤの宗教とは、同じ異教といっても違っている。今日のオリエンタリズムの問題の発生につながるものであった。

ギリシャ神話の中でアルテミスは愛好される女神である。その神話の古層に遡ることはできないが、オリェンポスの神話体系の中においてすら変遷している。アルテミスは、ホメロス以前の神話では、偉大な女性の自然神である。動物、植物のための守護女神である。ポセイドン、アポロン、ディオニュソスのいわゆるアポロン宗教体系の中での女性に位置づけられる。神話の中でアルテミスはゼオスの妻である。だからホメロス以前のアルテミスは、女性として、母として青年を庇護する。また乳児を世話する女性である。

ところが、ホメロス時代になると、アルテミス像が変化することに気づく。古い自然女神アルテミスはレト神話と融合する。これはギリシヤ神話が一層清潔さへ昇華したあらわれと見るべきだろう。もはやゼオスの妻としてでなく、ゼオスの娘として、ゼオスと自然の女神レオとの間に生れた。太陽と神託の神アポロと双子の妹である。かくてアポロ宗教の影響の下に処女アルテミスが誕生するのである。このようにしていままで持っていた母性、妻の性格は消え

てしまう。このようにして明朗な男性アポロ像と対になる女性のアルテミスに変っているのである。

だが、ここで神話の特徴でもあるのだが、ギリシヤのアルテミスは、完全に純粋な処女のイメージになり切れたかというとそうでない。古い神話伝承をひきづってアルテミスには、アルテミス・エイレイティア（子産み）のイメージをとゞめている。神話でもアルテミスの誕生のときは苦痛はなかったが、アポロの産褥のときにはレトは大きな苦痛を覚えた。こうしてアルテミスは安産の神として信仰をうるようになる。さらにホメロスの時代に死者の女神と結びついた自然神ともなっている。豊饒の神であり、農業の女神であり、水の流れるところがアルテミスの礼拝地になっているのである。

神話として、アルテミスは、若い頃に独立心に富んでいて、冒険好きで、少年のような性格をしていた。ゼオスは彼女にせがまれて、矢の入った矢筒と弓、彼女に付き従う妖精（ニンフ）の乙女の一団、猟犬の一群、走りやすい短かいチェニック（シンプルな衣服）、それと永遠の純潔を彼女に与えている。こうしてアルテミスは野山を走りまわることができ、野生生物や動物などはもちろん、助けを求める人間、とくに強姦され男の犠牲になった女性たちを救って保護するという、当時のギリシャの理想の女神像をつくり上げている。

だが、清潔で処女のアルテミスにも、恐しい、残酷な女性の要素が附加されている。彼女は淵で、妖精たちと裸で水浴しているのを盗み見た狩人アクタイオンをたちまち雄鹿に変え（化身）、自分の猟犬を使って八つ裂きにしてしまう。彼は愛人に対しても残酷である。愛するオリオンの頭に矢を放って彼を殺してしまう。

ギリシヤのアルテミスとエフェソスのアルテミス

このアルテミス像は、ギリシヤと小アジアを比較して見ると、ヘレニズム文明の精神風土を背負った女神と、小ア

ジアのオリエントの精神風土に根強く支えられたエフェソスの女神の違いを浮彫にしてくれる。

ギリシャのアルテミスは、処女で、自由で、自然そのまゝで、女性的であり、控え目である。しかし厳しく、残酷な死をもたらすことがあるが、およそ無責の純潔性を保っていた。穢れのない自然の本質的美を表現していた。（F・W・オットー）それは前述のようにアポロンと対になる女性像であった。

それは神事においても反映されている。アルテミスの神殿の祭司職は禁欲的であった。春の収獲祭で行なわれたダンスと音楽を愛好したけれどもあらゆる性的オルギアの性質とは無縁であった。

これに対して、小アジアのエフェソスのアルテミス像はどうであろうか。この立像は、オリエント的で、数多くの乳房（これは永遠の多産のシンボルである卵の集合とも解される）と動物シンボルを持ち、司育された雄牛と密蜂をその属性にしている。これはギリシヤの洗錬された文化的教養人にとってグロテスク的で、野生的と映ったであろう。

したがって、そのシンボルは決して処女性ではなかった。（ただしこの地のギリシヤ人にとって処女神と考えていた）神事に男子祭司と女子祭司があり、女性祭司は処女であり、男子祭司は去勢者であった。これは他の太母神信仰にみられる男根崇拝の名残りであって、原始宗教的な卑猥さをもっていた。

このエフェソスの女神は、エーゲ海沿岸で広い信仰を獲得し、同時代の世界の七大不思議の一つとして巡礼者が訪れる一大信仰地になったのである。港湾都市としても栄えたエフェソスにはエフェソスのアルテミスの像を土産のためにつくる工場があり、土産業者の利益の収入源になっていた。パウロがエフェソスで布教活動をしたとき、このいまわしい偶像崇拝に対して攻撃した。その業者たちは市民を組織して「エフェソスのディアナ（アルテミス）は偉大なり」と叫んでデモをし、パウロを危なく一命を落す危機に陥れたことは、「使徒伝」の語るところである。

何故ギリシヤとエフェソスでは純潔＝処女性と多産、オルギアとの違いが現われたのだろうか。エフェソスの女神

は、元来は非ギリシヤ的、したがって非ヘレニズム的であった。地中海世界で母権崇拝の発生源であったアマゾン族の女神からきている。インド＝ヨーロッパの神話、言語系列に属したギリシヤの神々と非インド＝ヨーロッパ系列にあったアマゾンの母権崇拝の相違がそこにある。しかしここではその深追いはしない。だが注目しなければならないことは、エフェソスの女神は、ギリシヤのアルテミス以前のアマゾン族から発して、エフェソスに居住するイオニア民族の宗教になっていたことだ。

アマゾン族では西歴前二千年頃に、「聖なる石（ディオペテ）」を木の幹の中に保護し、その木自体も神聖な物体として人々の信仰の対象にしていた。アマゾン族は「母権制」の社会であり、女性の戦士がこの木の中の「ディオペテ」を守った。後のアルテミスの神殿はその地に建てられたものである。初期の像は木像で、女性祭司＝巫女が執り行なった。

ではどうして、非ヘレニズム由来の女神がギリシヤのアルテミス神の神殿になったのか。考えられるのは、エフェソスに移り住んだギリシヤ人の一団が土着の女神と習合させて、アルテミスの女神としたことである。そのこととギリシャの建築技術による神殿の建立と不可避に結びついている。前六世紀中期になって大理石の柱の立つ聖地になっている。高さ一五メートルに及ぶ一二七本の支柱を使用した壮大麗美な外観は、全くギリシヤ式であった。この完成までに二〇〇年以上の歳月が流れたという。この神殿はその後火災によって炎上したが、その修復のための資金援助をアレキサンダー大帝に依頼するが、アレキサンダー大帝の方も新しい神殿の上に自身の名を彫りつけることを条件に建設費の提供を申し出た。しかし女神アルテミスの名の下にありたいという住民の意思は、その申し出を断わるほど堅かったという。それだけ女神信仰の観念は根強かったといえるだろう。この神殿も新興のキリスト教の力が強まることによって、キリスト教徒による破壊を免がれなかった。その上にマリア像が建立されたのである。

しかしいづれにしてもエフェソスのアルテミスは、ギリシヤの信仰圏に入ったということができるだろう。それは

神殿芸術が影響していた。アルテミスという名はクレタ島からペロポネソス半島、トラキア、小アジアの沿岸、エーゲ海の島々の人々の信仰心をとらえた。そこにギリシャの国力と建設技術と宗教との相関性を見ることができよう。だが、ギリシヤのアルテミスは、あくまでオリュンポスのゼオス、アポロンの神々の体系の中に位置づけられたアルテミス女神であったが、エフェソスの人にとってアルテミス女神は、男性神を受けつけない、信仰を独占した女神であったことを注目しなければない。

ローマのディアナとアルテミス

ローマのディアナが、ギリシヤのアルテミスとそれにエフェソスのアルテミスと習合するのは帝政期であり、パクス・ロマーナの時代である。ローマのアヴェンナの聖地にラテン人の共同の神殿が創設されて、イタリヤの公認のものになると同時にギリシヤのアルテミスと同列視されたのである。

このローマのアヴェンナ丘のディアナ神殿が創られるまでの経緯を見ると、ディアナ信仰は、ギリシヤとエフェソスの影響を受けながらも、ラテン人の独自の民族性が構成要素をなしていることに気付く。とともにもう一つ重要な点はイタリヤのディアナ女神もエフェソスのアルテミスと同じくその遡源をたどるとアマゾンの母権信仰に遡るということだ。

伝説によれば、オレステースがタウラス半島（クリミヤ）の王トアーヌスを殺した後、妹をつれてイタリヤに逃亡したが、そのさいタウラスのディアナの像を薪束の中に隠して持ってきたといわれる。このことは母権社会のクリミヤ起源説に真実味を与えている。

ディアナ信仰は、イタリヤのいたるところで民衆に滲透したが、歴史時代に入ってその映像が明らかにされるにつ

れ分ったことは、月と狩猟の神であるが祭日に女性が松明をかざして行進すること、神殿が女性結社の場の意味をもつこと、そしてディアナ神殿が奴隷のアジールになっており、奴隷が祭司を司ることから、女性結社と奴隷のイメージをもつ宗教であるということだ。

一体なぜ女性結社と奴隷（被圧迫者）は、民衆にそれほど心を動かすことになったのか。ディアナ信仰が、あれほどキリスト教の弾圧を受けながらも、古代、中世のみならず、近代にかけて、ケルトの女神と習合しながら普及し続けた秘密を解く鍵がそこにある。

ネミのディアナ信仰

イタリヤのディアナ信仰が全土の中でもっとも人気のあった聖地は、ネミ湖畔のアリキアの聖森に鎮座するラテン人の連合聖地と、もう一つはカプア郊外のティファタ山にあるディアナ・ティファタナという聖地である。後者のティファタのディアナ女神は最も古いとされるが、狩猟の守護神である。狩猟者は彼らの殺した動物を犠牲に供した。女神は手に松明をもち雌鹿を従えている。

しかしながら、イタリヤのディアナ女神をもっとも有名ならしめたのは、ネミ湖畔のアリキアのディアナ聖地である。このアリキアの聖森では奇妙な慣行が行われていた。毎年八月十三日に女性が松明を手にもってこの聖地に集まり、毛髪を洗う慣習である。この聖地はラテン人の連合の神の地である。なぜアリキアのディアナが奴隷と結びつくのか。これはラテン人がローマに敗れ、奴隷にされた。その奴隷たちが自分たちの土俗の宗教であるディアナ神を連合神としたことが伝えられている。

このディアナ女神は光の女神であり、女性の守護神である。子産みの女神であり、病いの女神である。その奉納物

を見ると素朴な土俗的性格をとどめている。その中に外陰、男根があり、性的オルギアが行なわれていたことを推測させる。さらに腕に赤ん坊をもって坐った女性の像があり、これは後のマリアの像の原型である。その他、手、足その他の体の部分の模造品があった。女神の祭日には花輪で飾った女性たちが松明をそれらの奉納物をもって聖地に赴いたのである。

男子禁制

ところがアリキアのディアでは確認できないが他のディアナの聖地については男子はそこに入ることができないということがはっきりしている。ここには閉鎖的な女性崇拝が行なわれていたことを示している。男子禁制の女人聖地というのは日本の修験道の行なった女人禁制と反対であることから興味深い。日本では修験道、仏教の拡まりが、宗教生活の中心から女性を追い出し山岳宗教の中から女性宗教者は次第に排除され、全面的に女人禁制になるが、中腹まで立入が許され、女人禁界がつくられている。修験道、仏教修造以前の古神道の残存は沖縄ののろ（女性祭司）に見られる。ここでは神と交わるのは女だけの資格であった。つまり男子禁制が見られた。

ローマのディアナ

ところがイタリヤ（南欧）では女神崇拝熱が強いために、女人だけの聖地がいたるところに存在した。それを全イタリヤに国家的に公認されるのは、中心地ローマに神体が移されて以来である。ローマのキルクスの上にあるアヴェンティンに主神殿の外にディアナ神殿が建立された。そこは男子禁制であった。多くの奉納物がある中で、もはや外陰とか男根のような土俗的なものは見られず赤ん坊を懐いた女性の像がある。それは元奴隷身分であったセルヴィウ

ス・トゥリウスの努力で建てられたようである。

これはアルキアのネミのディアナ神が国家の公認を得たことを意味する。そのさい神殿はイオニアにおけるエフェソスのアルテミスの連合聖地がモデルになっていた。このようにしてギリシヤのアルテミス、エフェソスのアルテミス＝ディアナとイタリヤのディアナは同じ女神として信仰を得たのである。

宗教と政治

したがって、ネミのディアナ女神がローマに移されたということについては国内の統治政策に利用するという政治的背景があったことは間違いない。一般に連合神は、ローカルな部族神による分散化を防ぎ、権力の集中にとって都合が良かったわけである。古代イスラエルにおいてもヤハウェの一神教は部族間の連合神であった。これが地中海世界にも多く見られた現象であり、ディアナ女神もローマの中央集権化のために利用されたといえるだろう。ネミのディアナからローマのディアナへの移転によって、ディアナ信仰が地中海世界の宗教勢力の分布図の中で特異な位置をもったことになる。

ローマ帝国は民衆の中に根強い人気を吸収するためにローマにディアナ女神を迎えると同時に、ギリシヤのオリュンポスの神々の体系のもつ洗錬さと融合しようとしている。

そこで、ギリシヤのアルテミス女神は、アポロ体系と一体となって流れ込んでいることに注目したい。そこに神の三連合、アポロ、ディアナ（アルテミス）とローマの女神ラトナが現われる。前五三一年に奉納されたローマのアポロ神殿からアウグストゥス帝と後のアポロ神殿までは三連合神であったが、後ラトナが除かれ、アポロとアルテミス＝ディアナの二面像で尊敬されるようになる。

ディアナが月の女神として、太陽のアポロと対になるのはこの時代である。もともと光の神であったディアナは、月の光を斎らす月の女神として、ルナと結びついていく。ディアナとルナは礼拝では同化されなかったけれども、学者や詩人たちから同じように月の女神とされるようになる。

しかもアルテミスとディアナが同列化されるのは、狩猟の女神と動物の守護神を共通にしていることだ。だがイタリヤのディアナも最初は森の狩猟神は知らなかったようだ。この観念は共和末期から受容されている。

フレーザーの『金枝篇』

ディアナ信仰は、十九世紀にはじまった文化人類学に決定的な意味をもった。それはフレーザーが『金枝篇』で取りあげたのが、アリキアのディアナ信仰であったことだ。フレーザーは『セム族の宗教』を書いたロバートソン・スミスとともにイギリス人類学の草分けの学者である。このケンブリッジ学派に属するフレーザーは、R・スミスとともに「トーテミズム」理論を提唱し、精神分析のフロイトの『トーテムとタブー』に決定的な影響を与えている。

そのフレーザーがなぜアリキアのネミのディアナ信仰に取りつかれたのか。彼は簡約本の『金枝篇』の序文の冒頭に「この書物の本来の目的はアリキアのディアーナ（ダイアナ）の祭司職継承を規定する注目すべき規定を説明することである」と書きしるしたように、この一点の疑問に向って、二十五年の歳月を費やし『金枝篇』十二巻のライフワークを完成させたのである。フレーザーは原始的信仰と宗教を綜合的に叙述する意図を持ったが、現に春、夏至、収獲にあたってヨーロッパの農民の行なう通俗的な祭について、つまり農民の信仰と慣習について民俗学の研究が進んでいることを知っていた。今日でいうフィールド・リサーチが慣行の断片を集めていたのである。アリキア民族について豊富な伝承が残されているけれども、フレーザーはむしろ古典の書籍を検索することによって、より最古の民

俗学的資料を見出すことができると確信した。彼は自ら調査しない、書斎のアームチェアの学者であり、世界の各地の宣教師と文通したり、旅行記から事実を収集したのである。

このアームチェア研究者としてのフレーザーにとってこの上なく興奮を覚えた民俗学的資料こそ、アリキアのディアナの神殿を司る祭司職の規則だった。

この祭司職の規則は実に奇妙な内容だった。この規則は、フレーザーによれば、古典古代のギリシヤやローマにその例を見ることはできないが、イタリヤ以外の、原始性と野蛮さをもった未開社会に見られるとしたのである。そこでフレーザーは祭司と王と取り替えると、祭司職の交替は、未開社会にみる「王殺し」の元型になりうる。「王殺し」とは「一定の期間の後に、または王の健康や精力が衰弱しはじめた時にいつでも彼を殺してしまう慣習」である。これはロシヤ、アラブ、アフリカに見ることができる。古代バビロニアのサカエア祭では、「一人の模擬王に王の衣を着せ、真実の王と妾どもを楽しむことが許され、五日間の親政の後に衣をはぎとられ、鞭うたれたすえ殺される」。

つまりフレーザーは、ディアナ女神の配偶神ウォルビウスを聖なる森の創設者であり、最初の王としての性格をもっているとした。森の王の称号のもとにディアナに祭司として奉仕し、その後の祭司は次々と他の者との決斗によって非業の最後をとげる祭司の系列の神聖的先任者、つまり元型である。と考えたのである。祭司と王が次々と現われる相手と決斗して、敗れれば非業の死のもとに交替する型を人類学的に「王殺し」と規定したのである。人間の深層に宿る心理を「貴種流離」などと同じ範疇でとらえられる「元型」である。またウェーバーの「支配の類型」にとりあげた「カリスマ」の思考と一脈通じている。

このアリキアの祭司職規定には祭司職を逃亡奴隷が司った。その逃亡奴隷はネミ人の王と称された。しかし他の誰でも彼に決斗で挑戦することができる。そのとき用いたのは聖なる森の幹木の枝——これこそが「金枝」なのである

——を折って彼が殺すことに成功すると彼が後継者になる。そのためネミの王はいつも武器をたづさえていた。

このフレーザーの『金枝篇』についての解釈はついては歴史家の間では疑問視されている。このことについて深追いすることはできないが、例えばローマ宗教史家のラッテがいる。批判点の一つは、イタリヤの国王は軍団国王であって、祭司ではない、ディアナの独特な崇拝は森の国王と関係しない。「聖なる王」というのはもともとアリキア共同体に相応しかったのであって、後になり彼は意味がなくなり、聖なる森の監視者になり、「決斗」は後になって入ってきたものであり、そのために奴隷が用いられ、逃亡奴隷のアジールになったのだ。だからオレステス伝説などを使って祭司職と王とを一諸にすることはできない、というのである。

この例に見るように、フレーザーの民俗学的成果が今日実証主義の歴史学者の批判にさらされていることは確認しておかねばならない。

しかしわれわれは『金枝篇』を読むことによって、ディアナ信仰にまつわるタブー規定を世界の民俗学的事例と平行して読みとることが可能だ、ということを知るだろう。その点で価値は失われていない。ディアナ信仰が、地中海・小アジアの太母神（マグナ・マーター）にまで源を遡ることができること、イタリヤ以外の未開社会の民俗学的慣行との平行現象を抉った功績は大きい。

聖なる女神と抽象の女神

そう考えていくと、ギリシヤ、ローマのヘレニズムの宗教体系が完成した時代に、一体ローマ人が女神に対してどういう宗教感情をもっていたかということに関心を持たざるを得ない。ローマのディアナ女神は、ローマ帝国の中の宗教体制の中でとくに国民に人気を得ていたヴィクトリア女神と対照的であることが分る。ヴィクトリア女神につい

ては別稿で触れる積りだが、西暦前二九年にアウグストゥスによって祭壇を建立されたヴィクトリア神は、ローマの永遠の勝利のためのシンボルであった。ローマ人たちは神話をもはや信仰として信じない社会にあった。聖なる原初的感覚は失われ、抽象的に、国家から人為的に鼓吹された軍神の女神が生れた。いまや正義（ユスティティア）の神殿が建立され、「勝利（ヴィクトリア）」とか「正義（ユスティティア）」という抽象的な女神が神の対象になった。神話の古層をもつ伝習的信仰観念とはかけ離れたものである。

この抽象的神信仰は「自由」「健康」「若さ」「誠実」「希望」「誉与」を対象にしている。法律を重じ秩序を愛するローマ人は聖なるものに対して特異な感覚をもっていた。したがって、ヴィクトリア女神はローマの抽象的神観念が生んだものであり、ローマ文明が始めて誕生させた宗教であった。だからキリスト教の支配する中世をくぐり抜け、フランス革命に蘇生しているのである。

ヘカテ亡霊信仰との習合

このヴィクトリア女神がローマ帝国の勝利のシンボルとして、国家公認の宗教であったのに対して、ディアナ女神は公式の表に立たない民間信仰であった。ディアナには陰花植物的臭いのする宗教としてとらえられていた。そのために、ローマにおいて、ギリシヤ神話体系の中で暗いイメージのヘカテ信仰と結びついたのである。ギリシヤのヘカテがローマに伝播したとき、ディアナにヘカテのもつ宗教的属性が加えられた。西歴前五世紀に民衆信仰として拡がったヘカテは亡霊群の女指導者であり、あらゆる魔術の守護神であった。ギリシヤ人にとってヘカテはもともとあらゆる亡霊、精霊の女神であった。地下の女王として黄泉の主、蛇、鞭、剣がその属性となっていた。

だから、ディアナはヘカテと習合して、民間信仰として、魂と肉体とが結合したり、分離したりするところ、産褥、

埋葬、三叉路、それに墓に出現する女神として崇拝された。そのためにディアナ女神はローマからアルプスを越え、ライン流域に伝播し、ゲルマン人の亡霊ペルヒトとして習合した。さらに森の女神信仰の厚かったケルト民族の間では、ディアナ信仰は、聖森のネミの信仰という名で受け入れられた。イギリス、アイスランドでディアナ信仰が根強く生き続けていたことは、エリザベス朝時代にロンドンで高まったダイアナ熱と無縁ではない。

このように、ディアナ信仰は、パクス・ロマーナの及ぶ地域に広く滲透した。しかも土着の女神信仰や亡霊信仰と習合していただけに、キリスト教会にとっては何よりも手強い宗教的ライバルになったのである。ローマ教会の教父たちは、ディアナをヘカテ、ゲルマン人のペルヒトと同列視し、空飛ぶ魔女群の筆頭にあげて、異教の危険性を説いたのである。

中世以降のディアナ信仰の運命について後述することにしたい。文献についてはその際に挙げたい。